

こんな中で栄養失調と重労働の疲れで斃れる者が続出する。

やがて春になり草木の芽が吹くころになると、お互いに缶詰の空き缶を拾ってきて、腰にぶら下げて行き、作業の合間に草木の芽を摘んで缶で茹で岩塩をかけて食べ、空腹を凌ぐのが一つの楽しみとなる。

その後、コムソモリスクの収容所に移動となり、ここでは道路工事の作業、時にはコルホーズの馬鈴薯の選別作業に回されることがあり、楽しみの一つだった。このころよりアクチブと呼ばれる人たちが来て、民主教育が盛んに行われる。この教育を受けないと日本には帰さないと言われ、仕方なく受ける。

シベリアの冬も近づく十月末、待ちに待った東京ダモイの列車に乗り、十月二十六日ナホトカに集結、迎えの引揚船が入り乗船が始まる。後の方にいた私の所までくると、ここより後は待てと言われ三、四十名が戻される。何事があったのかと心配していると、軍司令部にいた者は当時の調査があるということだった。それから一カ月余り、旧関東軍の軍司令部のことにつ

き詳細な調査が始まる。軍司令部の仕組み、仕事の内容等詳細にわたって調べられる。

ナホトカの港が凍結寸前の十一月三十日、待ちに待った復員船に乗ることができる。昭和二十四年十二月五日、懐かしい日本の土を踏むことができた。

七年ぶりの我が家へ戻って見ると、一緒にナホトカまで来た戦友たちが、確かに一緒に乗船したのに舞鶴に上陸したとき、いなかったがどうしたことだろうと心配し、八方手を尽くし探したがわからず、大変な騒ぎになっていたようだった。何はともあれ、無事に帰ったことを喜び合った。

## シベリア抑留記

京都府 中西 昇

現住所 京都府船井郡丹波町字八田

職業 農業 大正八年十一月十八日生 元陸軍兵長

昭和十八年五月一日、二回目の召集をうけて現住所

より京都伏見歩兵三七部隊へ入隊する。祖母、母、妹ら三名を残す。

昭和二十年八月十五日終戦。当時は南千島エトロフ島三原大隊に所属して守備に就いていた。

九月十八日ソ連軍により武装解除された。

九月二十二日ソ連兵に警備されつつ、ソ連領沿海州に入りソフガワニ収容所に入る。宿舎はシベリア特有の太い丸太を組み合せた建物でベチカで暖房されるが、零下五〇度の厳寒時は寒くて眠れない夜もあった。

労務―我々三原大隊は約一千名余で作業小隊を編成し、森林伐採の労務に就く。シベリアの冬は早く、十一月には降雪あり、厳しい寒さの中、二人挽きの大鋸で大木を倒す。直径一メートルもある大木が、梢をふるわせて辺りの枝を打ち払い轟音をひびかせて雪の中へ倒れて来る様は心臓が凍るような恐ろしいときもある。

抑留されて一番に思ったことは、何年抑留されるのか、果たして日本へ帰る日があるのかと、何の発表もないまま一日一日が過ぎていく。その一日一日が空腹

の連続である。朝、夕食とも雑穀のうすい粥とスープ（塩汁）で、昼食は黒パン少々で朝食の粥では食べた気がしないので黒パンまで食べてしまう。昼はスープだけの食事になってしまう。空腹を抱えての伐採の重労働は骨身を削る思いであった。冬の間には栄養失調になり、オーカー（屋内作業）班へ回された者や入院した者が大勢いた。

二年目も森林伐採の労務につく。食事は相かわらず悪く常習的空腹をかかえていた。この冬のころより民主教育が行われるようになった。「日本の天皇制と資本主義は労働者の敵だ、人民は搾取されるばかりである。全世界の国が共産主義にならなければ、我々の幸福はこない」と教育する。食うものもロクに食わず、重労働を強制しながら、何を言っても耳に入るものではない。表面は分かった顔をする。

三年目にハバロフスクの収容所へ移る。私は収容所の政治部員（ソ連将校）付きの当番を命ぜられた。作業の成績（ノルマ）などを記録する事務（ラポースベジ）などの手伝いをする。我々は食事が唯一の楽し

みの生活なのに今もってまもなく、ソ連の貧困さをつくづく推察する。

昭和二十三年七月中旬、ナホトカに集結する。

同年七月二十四日、ついに舞鶴へ上陸することができた。二度と祖国へ帰れるかどうか分らない抑留生活三年間の苦しみ。緑美しい山々は神の国のように光り輝いていた。

昭和二十三年七月二十八日、祖母らの待っている丹波へ帰った。

### 三度死線を越えて 迎える七十七歳

兵庫県 金川 浜 治

私は、昭和十六年十二月八日、日米開戦の当日、村役場より神戸対空監視所天神分所へ、午後六時より勤務せよとの命を受け、以来、昭和十七年八月まで二週間に一回二十四時間勤務で対空監視所勤務をいたし、

八月十五日、中部五十二部隊（岡山工兵隊）に入隊いたしました。所属は第二中隊（出羽隊）でした。

岡山工兵隊で三カ月間軍隊の基礎教育を受け、十一月下旬満州一八九三部隊（独立工兵十八連隊）に駁兵要員として転属を命ぜられ、目標ハルビンへ、前へ進めの号令で兵舎を後に下関へ、そして美しい日本国と別れて玄海灘を無事に釜山に上陸、朝鮮半島を北上してハルビン兵舎に着きました。岡山の木造兵舎と違って煉瓦造りの立派な建物でしたので、皆この兵舎での軍隊生活を楽しみに入舎いたしましたところ、部隊は満州佳木斯に移転した後です。

早速、翌朝佳木斯に向かって追従いたし、夕方佳木斯駅に到着。駅より行軍にて部隊に向かって出発いたしました。歩けど歩けどなかなか兵舎には到着いたしません。聞けば約二十キロほどとのこと、五時間ほど歩いてやっと兵舎に到着、全員くたくたになって就寝。翌朝練兵場に集合して入隊式、続いて編制が行われ、私は二大隊第五中隊（武藤隊）に本科兵として所属することになりました。三年間以来、五中隊へ入隊